

連携型中高一貫教育校におけるカリキュラム開発の可能性と課題に関する研究

上越教育大学大学院・修士課程 学校教育専攻・学習臨床コース
輪島市立門前中学校 松本 政彦

1. 研究目的

本研究では連携型中高一貫教育校でのカリキュラム開発の可能性と課題について、次の4つの意図を持って研究を進めた。まず、過去の文献資料ならびに意識調査等から連携型中高一貫教育の基本的な課題を探る。次に特色ある連携型中高一貫教育を実践している地域を訪問調査しカリキュラム開発の現状を把握する。さらに、訪問調査を行った地域を中心に連携型中高一貫教育校のカリキュラム開発の現状を「総合的な学習の時間」と「進路学習」を中心に分析を行う。最後に、連携型中高一貫教育の可能性を生かし、「つまずき」の解消となる理科の中高連携カリキュラムの具体的な提言を行う。

2. 論文の構成 (節題省略)

序 章

第1章 連携型中高一貫教育校における現状と基本的な課題

第2章 連携型中高一貫教育校の実際
—現地調査を踏まえた事例研究—

第3章 連携型中高一貫教育のカリキュラム開発の特徴

第4章 連携型中高一貫教育カリキュラム開発の可能性
—「トピック理科」の構想と提言—

終 章

3. 研究の概要

第1章においては、中高一貫教育の導入における過去の諸政策を振り返りながら、中高一貫教育の導入にあたってはそれぞれ時代背景が色濃く反映していることを指摘した。そして、それらの議論に多くは、中高一貫教育の理念や教育制度に関するものが主であり、カリキュラム開発についてはほとんど議論されてこなかった。つまり、中高一貫教育校は導入されたものの、制度としての導入が性急になされたため、カリキュラム面での立ち遅れは否めない状況にある。また、中高一貫教育では、学習内容については「ゆとり」の中で生徒の個性や創造力を伸ばすことができるとしている。しかし、生徒にとっての精神的な「ゆとり」とは、教科の授業をしっかり理解できることである。理解できず「つまずき」を抱えたままの生徒にとっては、「ゆとり」を感じることはできない。中高一貫教育が導入され法整備はなされたが、生徒が「ゆとり」をもって学習できる教科のカリキュラム開発については論じられなかった。また、連携型中高一貫校のほとんどが高校存続・生き残りをかけて導入実施しているということが明らかになった。そして、意識調査から中高6年を見通した体系的な指導計画が作成・実践されている地域とそうでない地域の格差が見られた。実践されている地域は、連携中学校と連携高校の調整がスムーズに図られている。ここでもカリキュラム開発の必要性が浮き彫りになった。

第2章では、連携型を導入している地域を地域性などから過疎地域型、地方都市型および都

市型3つに類型化した。過疎地域型と地方都市型の実態はほぼ同じであり、両型とも取り組んでいるカリキュラム開発の大きな柱は、「総合的な学習の時間」「進路学習」「教科の連携」3つであった。「総合的な学習の時間」や「進路学習」については、中高6年間を計画的・継続的で、地域の特色を活かしたカリキュラム開発が実践されていた。「教科の連携」については、乗り入れ授業など、どの地域でも積極的に取り組まれており、少人数授業や習熟度別授業などによって成果も表れている。しかし、「教科の連携」で期待される生徒のつまずき解消する取組は行われていない。このつまずきを解消すべき連携カリキュラム開発が求められている。都市型の連携型中高一貫教育校は、他の2つ過疎地域型や地方都市型とは大きく違う中高一貫教育校といっている。この都市型の連携高校は、高校存続ではなく高校改革の一環として連携型中高一貫教育の実践が行われていた。

第3章では、現地調査を中心に連携型中高一貫教育での「総合的な学習の時間」、「進路学習・キャリア教育」や「学校設定科目」の実践を分析してみた。その結果一定の成果を上げていることが明らかになった。しかし、「この実践は連携型中高一貫教育でなければできないことなのか」という問いに対して明確な返答が出来るか疑問が残る。また、「総合的な学習の時間」や「進路学習・キャリア教育」では成果を得ることができたが、教科のカリキュラム開発はどの地域でも進んでいないことが明らかになった。

第4章では、教科での連携型中高一貫教育カリキュラム開発として「トピック理科」の可能性を試みた。中高一貫教育の目的は、「ゆとり」の複線化である。単に制度的な接続の複線化だけでなく、重要なのは生徒の学習と生活の質の

充実であり、つまずきを克服して最低限の学力を保障することである。つまり生徒の成長を保障することである。そこで、つまずきを克服する「トピック理科」を提言した。「トピック理科」は、その発想があれば、教師の少しの努力と工夫によって実践できるものであり、有効なものになり得るものである。この「トピック理科」を実践することによって、中学校の教師が中学校の学習内容をベースにしなが、高校への接続として高校の学習内容を理解させることによって生徒のつまずきを克服することが期待できる。

この「トピック理科」ですべてのつまずきを解消することは難しいが、つまずきの実態を把握している中学校教師が指導することで、よりきめ細かい指導が可能となる。また、生徒にとっても気心のしれた教師に教わることの安心感も期待できる。

ここでは、理科の分野だけの提案であったが、数学や英語などつまずきの頻度が多い教科にも導入可能であり、効果が期待できる。また、この取組は、中高連携のみならず、小中連携にも応用できる可能性がある。

4. 今後の課題

トピック理科がどれだけ現場で実行可能か。実際上の課題をブラッシュアップさせることが必要である。「トピック理科」を実際の教育活動にフィードバックさせることを今後の課題にしたい。

指 導 和井田 清司